

国際研修のネットワークを感じた国際会議

Regional meeting of National TB control program managers and partners 会議に参加して

この会議は世界保健機関（WHO）の南東アジア地域事務局（SEARO）が定期的に主催して、地域全体の結核対策の推進を行うもので、2014年はインドのニューデリーで11月10日から14日まで行われました。地域内各国の結核対策課長、その国々のWHO医官、WHO本部医官、関係するパートナーが集まって会議が行われました。日本はWHOの西太平洋地区に属していますが、石川所長がアドバイザーとして招待されるほか、結核研究所のスタッフがこの地域の結核対策の技術的パートナーとして参加してきました。

石川所長が都合で参加できなかったため、座長やコメンテーター、そして結核研究所のこの地域への貢献、技術支援内容の発表（写真1）を求められました。

インドには出張で行ったことはなく、全く知らない世界に飛び込んでいくので、サッカーで言うところの敵地で試合を行うアウェーの気持ちでした。恐る恐る会場に入りますと、有病率調査の技術支援で私も関わっているバングラデシュやネパールからの参加者など知っている顔を見つけ、少しほっとしました。会議が始まって休憩時間になるとドクター石川はどうしたのかと声を掛けられたり、JICA研修を受けた人が日本語で挨拶をしてきたり、結核研究所に訪問したことがあると懐かしそうに言ってきました。

SEAROの結核課長で、この会議の責任者であるハイダー医官（Dr. Khurshid A. Hyder）からも日本語で話しかけられました。彼は、結核研究所が行っているJICA国際研修コースの卒業生です。ここはアウェーではなくホームなのだと感じました。そして石川所長によって守られているのだと実感しました。

会議の内容は、主に昨年の5月にWHO本部で採択された、

結核予防会結核研究所
国際協力・国際結核情報センター 国際研修科長

平尾 晋

ポスト2015年の新たな結核世界戦略の説明と、それぞれの国の現状と今後の方向性の検討、グローバルファンド（世界エイズ・結核・マラリア対策基金）の予算をどのように活用していくかという課題が話し合われました。特に、この会議に参加している国の多くは結核対策を自国の予算では賄いきれないので、グローバルファンドに頼っています。グローバルファンドの予算は減ってきているので、限られた予算でいかに有効活用するかが課題となっており、それに対する意見や議論が行われました。この点において、結核研究所と結核予防会は、国際研修コースでの人材育成や、官民連携、結核菌塗抹検査外部精度管理モデルの構築、官民連携ネットワークの構築、胸部レントゲンの撮影や読影や喀痰検査の研修など、様々な技術支援を行ってきた実績があるので、その実績を基に今後も協力していくことが大事だと感じました。

ニューデリーはデリーの南側に作られた新しい都市ですが、デリー自体がコンパクトな都市ですので、ニューデリーとデリーは1つの都市といった感じでした。デリーにはムガル帝国時代の1639年から9年をかけて作られた城塞のラール・キラー（写真2）という世界遺産があります。ニューデリーの駅では、古い列車が使用されています（写真3）、駅の表示板はデジタル化されていました（写真4）。駅前の人のエネルギーな様子を見ながら、これからどんどん新しいものが作られてくるのかなと感じました。

このような会議は初めてでしたので、貴重な体験となりました。



写真1 石川所長の代わりを務めた筆者



写真2 世界遺産 城塞ラール・キラー



写真3 現在使用されている列車



写真4 デジタル化された駅の時刻表示板